

受け継がれていく漆 ～想いを漆にのせて～

A2201419 坂本杏理

研究の背景

時が移ろう中で様々なものが変わっていき、やがて無くなってしまうものもある。そんななかでも変わらないものの一つに「親から子への愛」がある。多くの家庭で着物や貴金属などの宝物が親から子へと受け継がれているのは、単にそれ自体に金銭的な価値があるからということだけではなく、その宝物に「想い」が宿っているからではないだろうか。そこでそんな「想い」が伝えられる宝箱を、卒業研究のテーマとしてとらえることとし、新たな漆の魅力伝えたいと考えた。

研究の目的

「伝わる」デザインについて調べてみると、伝統工芸品には文様ひとつ一つに意味があり、構成的な美しさだけでないデザインが施されていることがわかった。そして親から子への愛という視点で考え、原点である自分の生まれ育った土地にまつわるデザイン(アイヌ文様)を宝箱へあしらうことにした。

- ◆ 他の塗料とは違う漆の魅力(温かい肌触りを持ちながらも硬質な塗膜、千年以上も持ちこたえる堅牢さ等)を生かし親の愛を表現し想いを形にすることに挑戦する。
- ◆ 伝統工芸品から学んだことを生かし、自分で新たなデザインを考案する。

研究のプロセス

1. デザイン考案・決定
 - ・ 地元の工芸品を調査
 - ・ 郷土館等の資料を用いアイヌ文様について調査
 - ・ 調査に基づき自分で文様を構成し、デザイン決定
2. 製作工程

自分で構成した文様



箱

- ・ デザインに基づき箱を設計
- ・ 木地制作・接着・製材
- ・ 木地かため
- ・ 布着せ、下地付け
- ・ 下塗り、中塗り、上塗り
- ・ 加飾

脚

- ・ 設計
- ・ 木地制作
- ・ かため
- ・ 加飾

木地制作



布着せ



下地



下塗り



中塗り



脚（透かし彫り）



考察・感想

親から子への愛を表現し宝箱を製作するという事で、漆の魅力を生かしつつ思いを伝えていきたいと思うようなデザインにすることを心掛けた。またアイヌの文様を扱うため、ただ文様をちりばめただけのデザインにしないということに重点をおき研究を進めていった。

箱上面に施したメインとなる文様には、「優しく見守っている」という意味をこめるために「ホシ」という文様を用い自分で再構成し、子を見守る親をイメージした。アイヌの衣服に用いられた藍染め、「ホシ」の輝く夜空をイメージした色を施した。脚は正倉院にまつられる献物箱を参考に透かし彫りで製作した。